

俺は杏奈ちゃんのお腹に両手を回し、ぐいっとお尻を突き出すような体勢にした。すると杏奈ちゃんはバランスを失い壁に手を付き肩越しに俺を睨んだ。

「ちよつと……！なにするんですか……！」

まあお目々うるうるでそんなことされても迫力ゼロなんだけどね。俺はつう、とまん筋に沿って指を這わせた。

「あひっ♡や、やめてくださいい……♡」

杏奈ちゃんは身を振らせる。

「やめて欲しかったら正直に言おうか？えっちなのは杏奈ちゃんだって。認めちゃいなよ」「わ、私は！えっちななんかじゃありません！こ、これは……！その、生理現象といえますか……！」

「へー。じゃあ杏奈ちゃんは、男に胸とかお尻揉まれて気持ちよくなったりしないんだね？」俺は杏奈ちゃんのおっぱいを下から持ち上げるようにして掴んだ。

「あうっ♡そ、それは……！」

「どうしたの？杏奈ちゃん？」

「うう……♡」

杏奈ちゃんは恥ずかしそうにもじもじとしている。俺は構わず続けた。